

Chidori naku Kushiro

Seichi Omuro

Abstract:

Shirashira to Kori kagayaki

Chidori naku

Kushiro no umi no Fuyu no tsuki kana

This poem is the most famous Japanese poem of 31 syllables (tanka) expressing Takuboku's Hokkaido period. It is generally thought that the meaning of the poem is simple and plain. However, if the anthology "Ichiaku no suna" is considered in detail, we will notice that Takuboku's delicate editing consciousness has not been understood correctly until now.

I would like to consider the consciousness of sequence organization in the anthology "Ichiaku no suna" from a new viewpoint in this paper.

キーワード：

歌集 初出 編集 推敲 構成

はじめに (問題の所在)

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

釧路の海の冬の月かな (『一握の砂』384)

この歌は、啄木の北海道流離の思い出を表現した『一握の砂』「忘れがたき人人 一」の章に収められている、集中屈指の名歌である。一首の意味は極めて明解である(と思われている)。例えば岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』^(注1)では「白く氷がかがやき、千鳥が鳴く、釧路の海岸の冬の月夜の光景よ。」の歌意になっている。しかし、この歌の表現世界を、『一握の砂』の編集意識までも含めて詳細に「理解」しようとするなら、その考察は一筋縄ではいかないように思われる。試みに、思いつくまま疑問点を列挙してみるなら、

- ▽ 釧路新聞の掲載歌「冬の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落つる時」との関連は？
- ▽ 東京朝日新聞の掲載歌「しらくくと氷かゞやき千鳥啼く釧路の海も思出にあり」との関連は？
- ▽ 右の歌が『一握の砂』では「冬の月」と表現されるが季節変更の意味は？
- ▽ 釧路の海に「千鳥」の鳴く季節は？ そして一首は実景か虚構か？
- ▽ 啄木「明治四十一年日誌」における三月十七日の記述との関連は？
- ▽ 「釧路歌群」の配列意図は？ 基本軸は時間の推移なのか？ 或いは他の編集意識なのか？

▽ 「忘れがたき人人 一」、及び『一握の砂』全体の配列意図との関連は？

などの項目が次々と挙げられる。もちろん右に示したそれぞれの疑問点は複雑に絡み合っていて、この歌の「理解」の困難さを際立たせている。しかし実は、橋本威『啄木『一握の砂』難解歌稿』^(注2)には、すでに右に記した殆どの疑問に対する詳細な考察がなされている。そこで、その考察結果の一部を以下に記してみるなら、

▽ 啄木「明治四十一年日誌」を分析するなら、その「思出」が、この詠の背後には潜んでいること、

▽ 従って、純粋な叙景歌とする従来の解釈は間違いであり、「清浄な神秘性を詠っている」と思われること、

▽ 初出の東京朝日新聞掲載歌に「釧路の海も思出にあり」とあるのは、同一歌群における他の四首の説明役を担わされた完結度の低い表現であること、

▽ それが『一握の砂』において「釧路の海の冬月かな」に改変されたのは、歌群が地名配列順になり説明役を担う必要がなくなり、本来の表現「釧路の冬の海の神秘性」を描出することが出来たためであること、

▽ 「千鳥」の季節の詮索については、「当時の釧路の人達が〈千鳥〉の鳴き声と受け取っていた」のなら、(事実はともかく) それだけでも「千鳥」と称する充分な根拠になり得ること、

などに要約されると思われる。以上の橋本説の詳細な考察により、先に示した問題点はかなり解消することになると思われる(実際、他の歌における橋本説には稿者は全面承服の場合が多い)。しかし、当該歌に関する限り、橋本説の根幹となる「釧路の海も思出にあり」から「釧路の海の冬月かな」への改変理由の分析には少しだけ無理があるように稿者には思われる。そして又、「千鳥」の季節に対する説明に対しても、稿者は全面的には承服しにくいと考えている。それは、当該歌における疑問を解消し啄木の編集意識にさらに迫るためには、別の視点からの考察が必要になるといえる。具体的に述べるなら「忘れがたき人人 一」、及び『一握の砂』全体の配列意図との関連を踏まえての考察が必要になるといえる。本稿のタイトルに「編集による表現」という副題を付けたのも、(橋本説に補足して)啄木歌の新しい解釈の視点を提起したいという思いからである。それでは項を移し、順次考察を試みたいと思う。

千鳥の鳴く季節

鳥居省三著『石川啄木 ―その釧路時代―』^{注3}の中に「啄木の歌をめぐる小論争」という紹介記事が収められている。少し長文になるが、問題点を整理するために該当箇所を引用してみる。

昭和三十六年、石川定氏が市立釧路図書館報『読書人』に「釧路での啄木を語る」という調査研究の成果を連載していたころ、啄木の歌に関する小さな論争があった。

それは郷土史研究家の佐藤直太郎氏が啄木の歌「しらしらと氷かがやき千鳥なく釧路の海の冬の月かな」を取り上げて、釧路の二月に千鳥は来ない、従って啄木のこの歌は、その観察に誤りがある、と指摘したことであった。氏は、その立証のため、しばらく渡り鳥の研究なども詳しく進めていた気配がある。勿論これは文書によって指摘したのでなく、啄木に関する話題の集まりの中であった。

これに対して啄木研究者であった石川定氏は、歌というものは一つの感動で詠むのであって、それが科学的な観察に基づくか否かは、問題として第二義的であり、啄木がゴメを間違えて「千鳥」と詠んだとしても、状況からいえば感動的に啄木はそう信じたのだから、いいではないか、歌の生命に変わりはない、という主張であった。物事を科学的実証主義にたっていた佐藤直太郎氏と、文学者で主情主義の歌の研究者であった石川定氏との主観の違いで、何か事あるごとにこのやりとりをしていた二人の先生を私は知っているが、議論は平行線をたどり、一年ほどして論争は止んだように見えた。石川氏はあえて反論を唱える立場をとらなかったが、佐藤直太郎氏は一時、この問題を明らかに文章にして世に問う構えを見せていたようであった。勿論、実現しないうちに二人とも世を去った。(以下省略・傍線稿者)

さて右の論争を簡略に整理してみるなら、「しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな」の歌に対して「千鳥」の存在を認めるべきか否かという問題に帰結するように思われる。両者を仮に「千鳥」否定説」と「千鳥」容認説」に分類するなら、

▼「千鳥」否定説 佐藤直太郎氏↓「釧路の二月に千鳥は来ない」科学的実証主義

▼「千鳥」容認説 石川定氏↓「感動的に啄木はそう信じた」「歌の生命に変わりはない」主情主義

ということになりそうである。佐藤氏が「釧路の二月に千鳥は来ない」と発言し「二月」に限定した根拠は不明であるが、いずれにしても後の論争は「千鳥」否定説」と「千鳥」容認説」との互いへの反発という流れに導かれることになる。

ところで、この論争における両説の対立は、「しらしらと」の歌が啄木の伝記的事実とどのように関連するののかという問題でもある。そこで、この歌に関連すると思われる啄木の「明治四十一年日誌」の三月十七日の記述を引用してみる。

十二時起床。何とはなく不快で今日も休む。灰神楽に逢った鉄瓶の尻みたいな顔をして、水戸が一寸来て行つた。

夕刻、日景君が衣川子と共に来た。一緒に晚餐を認める。与謝野氏の手紙と「明星」が社に来て居たといふから、女中をやつて取寄せる。今月の応募課題「瓶」の撰者を事後承諾で僕にして居る。手紙には、自然主義が大体から見ても文壇の一進歩だと書いてある。

梅川が、小さい花瓶に赤いリボンを結へて、燃ゆる様な造花の薔薇一輪をさしたのを持つて来た。日景君が散々揶揄する。日景君は自分の初恋の話をした。失恋といふ事は、恠魔男の性格まで変へるのかと思ふ。聴て帰つて行つて、佐藤と梅川残る。

二人が帰るといふので、門口まで送ると、戸外には霜かと冴ゆる月の影、ウツカリ下駄をつツかけて出た。心地がよい。誰の発議ともなく、復、此間の晩の浜へ行つた。汐が引いて居て、砂が氷つて居る。海は矢張静かだ。月は明るい。氷れる砂の上を歩いて知人岬の下の方まで行くと、千鳥が啼いた。生れて初めて千鳥を聞いた。千鳥！ 千鳥！ 月影が鳴くのか、千鳥の声が照るのか！ 頻りに鳴く。彼処でも此方でも鳴く。氷れる砂の上に三人の影法師は黒かつた。

(傍線稿者)

右の日記によれば、この日(明治四十一年三月十七日)に啄木は「生れて初めて千鳥を聞いた」ことになる。この感動はとても深かったものと思われ、匿名(おもはれ人)ではあるが、すぐに「冬の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落つる時」(釧路新聞・明治四十一年三月十九日)の作歌となっている。そして後に、「しら〜と氷かゞやき千鳥啼く釧路の海も思出に

あり」(東京朝日新聞・明治四十三年五月九日)と推敲されて発表されることになる。

さて、ここまでの経緯については誰にも異論はないと思われる。論争を引き起こす要因は、この歌が『一握の砂』「忘れがたき人人 一」の章に収められる際に「しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな」と改変されたことにある。それでは「釧路の海も思出にあり」という三月(春)の景表現は、何故に「釧路の海の冬の月かな」と改変されたことにある。改変されたのだろうか。この単純な問いに明解な回答を示した研究者は、実は皆無であると稿者は考えている。稿者は、景表現が「冬の月」に改変されたのは「忘れがたき人人 一」における章全体の配列意識に密接に結びついていると想定している。具体的に述べるなら、「忘れがたき人人 一」の章は「北海會遊回顧」の歌々からなるが、その配列には原則があり「函館歌群」「札幌歌群」「小樽歌群」「旭川歌群」「釧路歌群」それぞれの冒頭歌には地名が読み込まれているという事実である。確認の意味で、各歌群の冒頭歌を列挙してみる。

「函館歌群」の冒頭歌 307 函館の床屋の弟子を／おもひ出でぬ／耳剃らせるがこころよかりし
 「札幌歌群」の冒頭歌 337 札幌に／かの秋われの持てゆきし／しかして今も持てるかなし
 「小樽歌群」の冒頭歌 342 かなしきは小樽の町よ／歌ふことなき人人の／声の荒さよ
 「旭川歌群」の冒頭歌 371 名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の／宿屋安けし／我が家のごと
 「釧路歌群」の冒頭歌 384 しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな

右のうち、「旭川歌群」だけは固有の地名表記ではないが^(注4)、他の歌群には冒頭歌に必ず地名が詠みこまれていることに気付く。特に「小樽歌群」(十九首)と「釧路歌群」(三十首)で、唯一地名を含む歌が冒頭に配置されていることに着目するなら、そこには啄木の編集意識が反映していることは明らかと思われる。

すると、「しらしらと」の当該歌は「釧路」の地名を含むために「釧路歌群」の冒頭に配列されたことは理解して戴けると思う。従来、その直前の「さいはての駅に下り立ち／雪あかり／さびしき町にあゆみ入りにき」(383)の歌が「釧路歌群」の冒頭歌と想定されてきたが、この歌は釧路での生活状況を詠んだものではなく、「旭川↓釧路」という「移動の歌」の末尾に含まれるべきと思われる。なぜなら、「駅」「停車場」「汽車」「旅」「わかれ」等を詠みこんだ歌は「忘れがたき人人 一」

においてすべて「移動の歌」として配列されているからである（後に詳述する）。

さて、「しらしらと〜」の当該歌は「釧路」の地名を含んでいるために冒頭に置かれた。啄木が千鳥の鳴き声に感動したのは、先に引用した日記によれば三月十七日のことなので時間軸を基準にすれば本来なら「釧路歌群」の末尾部に配列されたはずである。それが、歌群の冒頭に地名を含む歌を配置するという編集方針のために「さいはての〜」の歌の直後に置かれたことになる。稿者は「釧路の海も思出にあり」という三月（春）の景表現が、「釧路の海の冬の月かな」という「冬」の景表現に改変された理由はそこにあると思う。項を移し、その問題をさらに考えてみたい。

〈しなぎ歌〉としての配列意識

前項においてすでに説明してきたように、「しらしらと〜」の直前の歌は「さいはての駅に下り立ち／雪あかり／さびしき町にあゆみ入りにき」であり、作者が「雪あかり」の景の中で歩むのは「さびしき」「さいはて」の町であった。そして「しらしらと〜」の直後に配列されているのは「こほりたるインクの罅を／火に翳し／涙ながれぬともしびの下」の歌であり、こちら「こほりたるインク」に「涙ながれぬ」「さいはて」の地の冷たく寂しい心情に溢れている。「しらしらと〜」の歌は、この両歌に挟まれ、両歌の心情を結びつけるために結句を「釧路の海の冬の月かな」に改変したと思われる。つまり、配列構成を完成させるための改変ということになる。ここで注意すべきなのは、当該歌に関連する次の二首であるが、

A しら／＼と水かがやき千鳥啼く釧路の海も思出にあり（東京朝日新聞・明治四十三年五月九日）

B しらしらと水かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな（『一握の砂』384）

におけるA→Bへの改変は、「初出」↓「完成稿」という単純な推敲関係ではないということである。その意味で、木股知史『一握の砂／黄昏に／収穫』^{（注5）}における次の指摘は重要な意味を持つていると思われる。

初出では、「思出にあり」というように、回想起点を提示していたが、推敲によって、純粹な叙景歌となっている。白と灰色の雪と流水、あるいは、凍結した海と、空の冴えた月の構成する、凜とした冬の情景が提示される。日記の記述から、女性や芸者と見た光景が背後にあるとする理解があるがとらない。配列としては、釧路の回想の初めに情景を提示し

てみせたという意図があるだろう。(傍線稿者)

右の木股説によれば、A「釧路の海も思出にあり」には「日記の記述」に認められる「女性や芸者と見た光景」が詠みこまれているが、B「釧路の海の冬のかな」には、直前に配列されている「さいはての」の歌に導かれた「凜とした冬の情景」が詠みこまれていて「純粋な叙景歌」と改変されていることになる。つまり、A「釧路の海も思出にあり」とB「釧路の海の冬のかな」は「初出」↓「完成稿」という単純な推敲関係ではなく、完全な「別歌」ということになる。この確認さえするならば、「千鳥」否定説と「千鳥」容認説とにおける不毛な論争は解消されるように思われる。

ところで、このような「編集による表現」の手法は、稿者が以前に報告した「つなぎ歌」の発想と全く同一であると思われる。例えば拙稿「やはらかに降る雪——〈つなぎ歌〉としての『一握の砂』435番歌——」^{〔注6〕}では、次の両歌における改変の問題になると思われる。その該当歌は啄木の叙景歌を代表する名歌であるが、次に示して表現改変の理由を(本稿補足のため簡略に)整理してみたい。

A 春の雪滝山町の三階の煉瓦造によこさまに降る (『東京朝日新聞』明治四十三年五月十六日号)

B 春の雪／銀座の裏の三階の煉瓦造に／やはらかに降る (『一握の砂』453)

右の歌を比較するならば、結句部に「よこさまに降る」から「やはらかに降る」への大幅な改変が確認される。両歌は同じ「春の雪」の景表現でありながら、「東京朝日新聞」のA「よこさまに降る」では横殴りの激しい雪を連想させるのに対し、『一握の砂』のB「やはらかに降る」ではふんわりとした牡丹雪のイメージになっている。つまり両歌は、全く別の景表現に改変されていることになる。この改変の理由は、『一握の砂』において前後の表現世界を踏まえた配列意識に求められると思う。この場合なら「やわらかさ」のイメージが歌群を結びつけていることになる。『一握の砂』における前後の歌の配列意識を分析してみるなら、その編集意識は明確に理解されると思われる。そこで、その配列構成のイメージを表示すると次のようになる。

(春ののどかさ・やわらかさ)

(やわらかさ)

こころよく／春のねむりをむさぼれる／目にやはらかき庭の草かな (『一握の砂』451)

(のどかさ・やわらかさ)

赤煉瓦遠くつづける高塀の／むらさきに見えて／春の日ながし(『一握の砂』452)

(やわらかい牡丹雪)

春の雪／銀座の裏の三階の煉瓦造に／やはらかに降る(『一握の砂』453)

(やわらかい牡丹雪のイメージ)

よごれたる煉瓦の壁に／降りて融け降りては融くる／春の雪かな(『一握の砂』454)

右の一連の歌群において、仮に「春の雪」の歌の結句が、改変前の「よこさまに降る」という横殴りの激しい雪景色であったなら配列構成は完成しないことに気付く。前後の歌のやわらかいイメージに同調させ、その表現を輝かせるために「やはらかに降る牡丹雪」の景表現は誕生したのであり、そこには啄木の繊細な「編集による表現」の手法が認められる。その啄木独自の手法を稿者は〈つなぎ歌〉と呼称しているが、本稿で考察している「しらしらと」の歌も全く同一の編集手法であり〈つなぎ歌〉として認定すべきと思われることを補足として記しておきたい。

「忘れがたき人」の配列意識、及び全歌一覧

前項において「しらしらと」の歌が「釧路歌群」の冒頭歌として配列されていること、及び、その配列には〈つなぎ歌〉の手法が導入されていることを指摘してきた。そこで、その私見の妥当性を検討するために、ここで「忘れがたき人」の章全体の配列意識を確認しておきたい。『一握の砂』における編集意識についてはすでに多くの研究がなされているが、従来の諸説を総括しながら、近藤典彦『『一握の砂』の研究』^(注7)では、「忘れがたき人」の章の配列意識を明解に整理している。近藤説によれば、まず章全体を飾る「プロローグ」の一首は「潮かをる北の浜辺の／砂山のかの浜薔薇よ／今年も咲けるや」であり、エピローグ「郎淘沙／ながくも声をふるはせて／うたふがごとき旅なりしかな」までの歌群の配列状況を次のように説明している。

次に、前述のように洪民から青森までの旅をうたう二首、ついで函館時代をうたう二六首、函館を去って札幌に向かう夜汽車の歌四首、札幌時代をうたう四首、札幌を去って小樽へ向かう車中の歌一首、小樽時代をうたう一九首、中央小樽駅をたつて岩見沢・旭川経由で釧路に着くまでの歌二二首、釧路時代の歌三一首が編まれる。以上一〇首の歌々の抒情と韻律に身をゆだねて来たものには、万感胸をうつエピソードが待っている。(傍線稿者)

右の指摘は「忘れがたき人人 一」の配列状況を整理したものであるが、近藤説の「小樽↓釧路」移動の歌、及び「釧路歌群」については一部に修正が必要であると稿者には思われる。まず、これまで説明して来た通り「釧路歌群」の冒頭歌は「さいはての〜」(383)ではなく「しらしらと〜」(384)であると思われることが挙げられる。啄木の編集意識の特色は「各地の生活詠」と「移動の歌」を峻別している点にあり、「移動の歌」には「汽車」「駅」「停車場」「旅」「わかれ」等が必ず詠まれていることに気付く。すると当然、「さいはての駅に下り立ち」(383)は「移動の歌」として配列されていることになら。又、近藤説の「小樽↓釧路」移動の歌についても、旭川は短期滞在ではあるが「生活詠」になっていることを踏まえるのなら「旭川歌群」として処理すべきであると稿者は考える。両説による配列意識を整理するために、次に対照表を記し、それを元に配列意識の確認のため全歌の一覧も示してみる。

近藤説による「忘れがたき人人 一」の配列意識			大室説による「忘れがたき人人 一」の配列意識		
〔歌番号〕	〔歌数〕	〔配列区分〕	〔歌番号〕	〔歌数〕	〔配列区分〕
304	一首	プロローグ	304	一首	プロローグ
305〜306	二首	洪民↓青森	305〜306	二首	洪民↓青森
307〜332	二六首	〔函館歌群〕	307〜332	二六首	〔函館歌群〕
333〜336	四首	函館↓札幌	333〜336	四首	函館↓札幌
337〜340	四首	〔札幌歌群〕	337〜340	四首	〔札幌歌群〕
341	一首	札幌↓小樽	341	一首	札幌↓小樽
342〜360	一九首	〔小樽歌群〕	342〜360	一九首	〔小樽歌群〕

361~382	二首	小樽↓釧路	361~370	一首	小樽↓旭川
383~413	三一首	「釧路歌群」	371~373	三首	「旭川歌群」
414	一首	エピソード	374~383	一首	旭川↓釧路
			384~413	三〇首	「釧路歌群」
			414	一首	エピソード

※右のゴシック体の個所が変更点である。

さて以上のように、「忘れがたき人人 一」の章における配列意識を整理してみた。本稿では「しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな」の歌が「釧路歌群」の冒頭歌として配列されたために、本来は春の歌なのに冬の景表現に改変されたという想定が前提になっている。その想定とは、稿者が〈つなぎ歌〉と命名した啄木独自の編集手法ということになる。そこで、その想定が妥当であることを確認するために、以下に「忘れがたき人人 一」の全歌を一覧しておきたい。

「忘れがたき人人 一」(配列意識確認のための全歌一覧)

- ・「函館歌群」「札幌歌群」「小樽歌群」「釧路歌群」の冒頭歌の地名を太字で示した
- ・「移動の歌」に含まれる「汽車」「駅」「停車場」「旅」「わかれ」等に傍線を付した
- ・大室説による配列意識のうち、従来の諸説との変更点は下部をゴシック体にした

304 潮かをる北の浜辺の／砂山のかの浜薔薇よ／今年も咲けるや

プロローグ

右の一首は章全体のプロローグ

305 たのみつる年の若さを数へみて／指を見つめて／旅がいやになりき

洪民↓青森①

306 三度ほど／汽車の窓よりながめたる町の名なども／したしかりけり

洪民↓青森②

以上二首「洪民↓青森」移動の歌

- 3 0 7 函館の床屋の弟子を／おもひ出でぬ／耳剃らせるがこころよかりし
 3 0 8 わがあとを追ひ来て／知れる人もなき／辺土に住みし母と妻かな 函館②
 3 0 9 船に酔ひてやさしくなれる／いもうとの眼見ゆ／津軽の海を思へば 函館③
 3 1 0 目を閉ちて／傷心の句を誦してゐし／友の手紙のおどけ悲しも 函館④
 3 1 1 をさなき時／橋の欄干に糞塗りし／話も友はかなしみてしき 函館⑤
 3 1 2 おそらくは生涯妻をむかへじと／わらひし友よ／今もめとらず 函館⑥
 3 1 3 あはれかの／眼鏡の縁をさびしげに光らせてゐし／女教師よ 函館⑦
 3 1 4 友われに飯を与へき／その友に背きし我の／性のかなしさ 函館⑧
 3 1 5 函館の青柳町こそかなしけれ／友の恋歌／矢ぐるまの花 函館⑨
 3 1 6 ふるさとの／麦のかをりを懐かしむ／女の眉にこころひかれき 函館⑩
 3 1 7 あたらしき洋書の紙の／香をかきて／一途に金を欲しと思ひしが 函館⑪
 3 1 8 しらなみの寄せて騒げる／函館の大森浜に／思ひしことども 函館⑫
 3 1 9 朝な朝な／支那の俗歌をうたひ出づる／まくら時計を愛でしかなしみ 函館⑬
 3 2 0 漂泊の愁ひを叙して成らざりし／草稿の字の／読みがたさかな 函館⑭
 3 2 1 いくたびか死なむとしては／死なざりし／わが来しかたのをかしく悲し 函館⑮
 3 2 2 函館の臥牛の山の半腹の／碑の漢詩も／なけば忘れぬ 函館⑯
 3 2 3 むやむやと／口の中にてたふとげの事を呟く／乞食もありき 函館⑰
 3 2 4 とるに足らぬ男と思へと／言ふごとく／山に入りనికి／神のごとき友 函館⑱
 3 2 5 巻煙草口にくはへて／浪あらし／磯の夜霧に立ちし女よ 函館⑲
 3 2 6 演習のひまにわざわざ／汽車に乗りて／訪ひ来し友とのめる酒かな 函館⑳
 3 2 7 大川の水の面を見るごとに／郁雨よ／君のなやみを思ふ 函館㉑
 3 2 8 智慧とその深き慈悲とを／もちあぐみ／為すこともなく友は遊べり 函館㉒
 3 2 9 こころざし得ぬ人人の／あつまりて酒のむ場所が／我が家なりしかな 函館㉓

※「函館歌群」冒頭歌

- 330 かなしめば高く笑ひき／酒をもて／悶を解すといふ年上の友 函館²⁴
- 331 若くして／数人の父となりし友／子なきがごとく酔へばうたひき 函館²⁵
- 332 さりげなき高き笑ひが／酒とともに／我が腸に沁みにけらしな 函館²⁶
- 以上二十六首「函館歌群」
- 333 呟呻嘆み／夜汽車の窓に別れたる／別れが今は物足らぬかな 函館↓札幌①
- 334 雨に濡れし夜汽車の窓に／映りたる／山間の町のともしびの色 函館↓札幌②
- 335 雨つよく降る夜の汽車の／たえまなく雫流るる／窓硝子かな 函館↓札幌③
- 336 真夜中の／俱知安駅に下りゆきし／女の鬢の古き痕あと 函館↓札幌④
- 以上四首「函館↓札幌」移動の歌
- 337 札幌に／かの秋われの持てゆきし／しかして今も持てるかなしみ 札幌① ※「札幌歌群」冒頭歌
- 338 アカシヤの街樾にポプラに／秋の風／吹くがかなしと日記に残れり 札幌②
- 339 しんとして幅広き街の／秋の夜の／玉蜀黍の焼くるにほひよ 札幌③
- 340 わが宿の姉と妹のいさかひに／初夜過ぎゆきし／札幌の雨 札幌④
- 以上四首「札幌歌群」
- 341 石狩の美国といへる停車場の／柵に乾してありし／赤き布片かな 札幌↓小樽
- 右の一首「札幌↓小樽」移動の歌
- 342 かなしきは小樽の町よ／歌ふことなき人人の／声の荒さよ 小樽① ※「小樽歌群」冒頭歌
- 343 泣くがごと首ふるはせて／手の相を見せよといひし／易者もありき 小樽②
- 344 いささかの銭借りてゆきし／わが友の／後姿の肩の雪かな 小樽③
- 345 世わたりの拙きことを／ひそかにも／誇りとしたる我にやはあらぬ 小樽④
- 346 汝が痩せしからだはすべて／謀叛気のかたまりなりと／いはれてしこと 小樽⑤
- 347 かの年のかの新聞の／初雪の記事を書きしは／我なりしかな 小樽⑥
- 348 椅子をもて我を撃たむと身構えし／かの友の酔ひも／今は醒めつらむ 小樽⑦
- 349 負けたるも我にてありき／あらずの因も我なりしと／今は思へり 小樽⑧

- 350 殴らむといふに／殴れとつめよせし／昔の私のいとほしきかな
 351 汝三度／この咽喉に剣を擬したりと／彼告別の辞に言へりけり
 352 あらそひて／いたく憎みて別れたる／友をなつかしく思ふ日も来ぬ
 353 あはれかの眉の秀でし少年よ／弟と呼べば／はつかに笑みしが
 354 わが妻に着物縫はせし友ありし／冬早く来る／植民地かな
 355 平手もて／吹雪にぬれし顔を拭く／友共産を主義とせりけり
 356 酒のめば鬼のごとくに青かりし／大いなる顔よ／かなしき顔よ
 357 樺太に入りて／新しき宗教を創めむといふ／友なりしかな
 358 治まれる世の事無さに／飽きたりといひし頃こそ／かなしかりけれ
 359 共同の薬屋開き／儲けむといふ友なりき／詐欺せしといふ
 360 あをじろき頬に涙を光らせて／死をば語りき／若き商人
 361 子を負ひて／雪の吹き入る停車場に／われ見送りし妻の眉かな
 362 敵として憎みし友と／やや長く手をば握りき／わかれといふに
 363 ゆるぎ出づる汽車の窓より／人先に顔を引きしも／負けざらむため
 364 みぞれ降る／石狩の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな
 365 わが去れる後の噂を／おもひやる旅出はかなし／死ににゆくごと
 366 わかれ来てふと瞬けば／ゆくりなく／つめたきものの頬をつたへり
 367 忘れ来し煙草を思ふ／ゆけどゆけど／山なほ遠き雪の野の汽車
 368 うす紅く雪に流れて／入日影／曠野の汽車の窓を照せり
 369 腹すこし痛み出でしを／しのびつつ／長路の汽車にのむ煙草かな
 370 乗合の砲兵士官の／剣の鞘／がちやりと鳴るに思ひやぶれき

小樽⑨

小樽⑩

小樽⑪

小樽⑫

小樽⑬

小樽⑭

小樽⑮

小樽⑯

小樽⑰

小樽⑱

小樽⑲

以上十九首「小樽歌群」

小樽↓旭川①

小樽↓旭川②

小樽↓旭川③

小樽↓旭川④

小樽↓旭川⑤

小樽↓旭川⑥

小樽↓旭川⑦

小樽↓旭川⑧

小樽↓旭川⑨

小樽↓旭川⑩

以上一〇首「小樽↓旭川」移動の歌

371 名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の／宿屋安けし／我が家のごと
 372 伴なりしかの代議士の／口あける青き寐顔を／かなしと思ひき
 373 今夜こそ思ふ存分泣いてみむと／泊りし宿屋の／茶のぬるさかな

旭川① ※「旭川歌群」冒頭歌
 旭川②
 旭川③

以上三首「旭川歌群」

374 水蒸気／列車の窓に花のごと凍てしを染むる／あかつきの色
 375 ごおと鳴る凧のあと／乾きたる雪舞ひ立ちて／林を包めり
 376 空知川雪に埋れて／鳥も見えず／岸辺の林に人ひとりゐき
 377 寂寞を敵とし友とし／雪のなかに／長き一生を送る人もあり
 378 いたく汽車に疲れて猶も／きれぎれに思ふは／我のいとしきなりき
 379 うたふごと 駅の名呼びし／柔和なる／若き 駅夫の眼をも忘れず
 380 雪のなか／処処に屋根見えて／煙突の煙うすくも空にまよへり
 381 遠くより／笛ながながとひびかせて／汽車今とある森林に入る
 382 何事も思ふことなく／日一日／汽車のひびきに心まかせぬ
 383 さいはての 駅に下り立ち／雪あかり／さびしき町にあゆみ入りにき
 384 しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな
 385 こほりたるインクの罫を／火に翳し／涙ながれぬともしびの下
 386 顔とこゑ／そのみ昔に変わらざる友にも会ひき／国の果にて
 387 あはれかの国のはてにて／酒のみき／かなしみの滓を啜ることくに
 388 酒のめば悲しみ一時に湧き来るを／寐て夢みぬを／うれしとはせし
 389 出しぬけの女の笑ひ／身に沁みき／厨に酒の凍る真夜中
 390 わが酔ひに心いたためて／うたはざる女ありしが／いかなれるや
 391 小奴といひし女の／やはらかき／耳朶なども忘れがたかり

旭川↓釧路①
 旭川↓釧路②
 旭川↓釧路③
 旭川↓釧路④
 旭川↓釧路⑤
 旭川↓釧路⑥
 旭川↓釧路⑦
 旭川↓釧路⑧
 旭川↓釧路⑨
 旭川↓釧路⑩

以上一〇首「旭川↓釧路」移動の歌
 釧路① ※「釧路歌群」冒頭歌
 釧路②
 釧路③
 釧路④
 釧路⑤
 釧路⑥
 釧路⑦
 釧路⑧

- 392 よりそひて／深夜の雪の中に立つ／女の右手のあたたかさかな 釧路⑨
- 393 死にたくはないかと言へば／これ見よと／咽喉の痕を見せし女かな 釧路⑩
- 394 芸事も顔も／かれより優れたる／女あしざまに我を言へりとか 釧路⑪
- 395 舞へといへば立ちて舞ひにき／おのづから／悪酒の酔ひにたふるまでも 釧路⑫
- 396 死ぬばかり我が酔ふをまちて／いろいろの／かなしきことを囁きし人 釧路⑬
- 397 いかにせしと言へば／あをじろき酔ひざめの／面に強ひて笑みをつくりき 釧路⑭
- 398 かなしきは／かの白玉のごとくなる腕に残せし／キスの痕かな 釧路⑮
- 399 酔ひてわがうつむく時も／水ほしと眼ひらく時も／呼びし名なりけり 釧路⑯
- 400 火をしたふ虫のごとくに／ともしびの明るき家に／かよひ慣れにき 釧路⑰
- 401 きしきしと寒さに踏めば板軋む／かへりの廊下の／不意のくちづけ 釧路⑱
- 402 その膝に枕しつつも／我がこころ／思ひしはみな我のことなり 釧路⑲
- 403 さらにさらと氷の屑が／波に鳴る／磯の月夜のゆきかへりかな 釧路⑳
- 404 死にしとかこのごろ聞きぬ／恋がたき／才あまりある男なりしが 釧路㉑
- 405 十年まへに作りしといふ漢詩を／酔へば唱へき／旅に老いし友 釧路㉒
- 406 吸ふごとに／鼻がびたりと凍りつく／寒き空気を吸ひたくなりぬ 釧路㉓
- 407 波もなき二月の湾に／白塗の／外国船が低く浮かべり 釧路㉔
- 408 三味線の絃のきれしを／火事のごと騒ぐ子ありき／大雪の夜に 釧路㉕
- 409 神のごと／遠く姿をあらはせる／阿寒の山の雪のあけぼの 釧路㉖
- 410 郷里にゐて／身投げせしことありといふ／女の三味にうたへるゆふべ 釧路㉗
- 411 葡萄色の／古き手帳にのこりたる／かの会合の時と処かな 釧路㉘
- 412 よごれたる足袋穿く時の／気味わるき思ひに似たる／思出もあり 釧路㉙
- 413 わが室に女泣きしを／小説のなかの事かと／おもひ出づる日 釧路㉚

以上三十首「釧路歌群」

414 浪陶沙／ながくも声をふるはせて／うたふがごとき旅なりしかな

エピソード

右の一首は章全体のエピソード

まとめ（確認と課題）

さて本稿においては、啄木の代表的な叙景歌「しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな」の一首を「理解」しようと試みてきたことになる。しかし、その考察には当該歌が「釧路歌群」の冒頭に配列された意味を追究することから始めなければならず、問題は多岐に亘り「忘れがたき人人 一」全体の配列意識にまで深く関わるようになってしまった。結果的に論旨が不明確になってしまった印象がある。そこで、（蛇足ではあるが）ここにまとめとして論旨を再確認して整理しておくことにする。

〔確認1〕「千鳥」を含む当該歌は最初「釧路新聞・明治四十一年三月十九日号」に匿名（おもはれ人）ではあるが「冬の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落つる時」として発表され、後「東京朝日新聞・明治四十三年五月九日号」に「しら／＼と氷かゞやき千鳥啼く釧路の海も思出にあり」と推敲されて発表された。

〔確認2〕「明治四十一年日誌」の記述によれば、啄木が初めて「千鳥」の鳴き声を聞いたのは明治四十一年三月十七日のことであり、右の新聞掲載の両歌は、その感動を素直に詠みこんだ歌ということになる。

〔確認3〕右の新聞掲載歌の結句「釧路の海も思出にあり」は『一握の砂』では「しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな」と改変されている。前者には「女性や芸者と見た光景」が詠みこまれているが、後者には「凜とした冬の情景」が詠みこまれ「純粋な叙景歌」へと改変されていることになる。

〔確認4〕つまり「しらしらと／＼」の歌は「初出」↓「完成稿」という単純な推敲関係ではなく「別歌」への改変と思われる。この改変は『一握の砂』に収める際、直前の歌「さいはての駅に下り立ち／雪あかり／さびしき町にあゆみ入りにき」の「凜とした冬の情景」に導かれた表現と思われる。そして、この啄木独自の配列意識は、稿者が以前に想定した〈つなぎ歌〉の編集手法と全く同一と思われる。

〔確認5〕「しらしらと」の歌が「釧路歌群」（三十首）の冒頭に配列された理由は、唯一「釧路」の地名が詠みこまれているためと思われる。従来の説では「釧路歌群」の冒頭歌は「さいはての」の歌と想定されていたが、「さいはての」には「駅」が含まれていて「移動の歌」として配列されていると思われる。

〔確認6〕「忘れがたき人人 一」の配列では「各地の生活詠」と「移動の歌」を峻別している点に特色があり、「移動の歌」には「汽車」「駅」「停車場」「旅」「わかれ」等が必ず詠まれていることに気付く。すると従来は「小樽↓釧路」移動の歌と想定されていた歌群の一部（371〜3）は「旭川歌群」に修正すべきと思われる。

〔課題〕本稿での考察は「忘れがたき人人 一」の章に限定されるため、『一握の砂』五章全体との連関に論及することができなかった。そのため、特に啄木独自の「つなぎ歌」の手法との関係については今後深く考察したいと考えている。稿者の目下の研究テーマは「つなぎ歌」としての「歌集初出歌」の分析にある。配列構成を完成させる場合「元歌」があれば、それを改変して「つなぎ歌」として配列するが、「元歌」がない場合には編集時点で配列を完成させるための歌を創作したはずである。『一握の砂』最終編集の時点で多くの「歌集初出歌」が登場するが、それらの大部分は「つなぎ歌」としての「歌集初出歌」であると稿者は想定している。そのため、啄木独自の「編集による表現」の意識を、そのような新しい視点から考察したいと考えている。

（注記）

- (1) 岩城之徳著『啄木歌集全歌評釈』（筑摩書房・昭和六〇年三月）
- (2) 橋本威著『啄木「一握の砂」難解歌稿』（和泉書院・平成五年一〇月）
- (3) 鳥居省三著『石川啄木―その釧路時代―』（釧路新書7・昭和五五年九月）、但し北畠立朴補注による増補版（釧路新書30・平成二三年一月）も刊行されている
- (4) 後述する近藤説では「旭川歌群」という設定はない。それは「小樽↓釧路」移動の歌の中に旭川での歌（371〜3）も含まれているためである。稿者が「旭川歌群」を設定したのは、歌の内容が「移動の歌」でなく「旭川での生活詠」であることに拘ったためである。もちろん、近藤説に従っても本稿の論旨には支障はない。
- (5) 木股知史『一握の砂／黄昏に／収獲』（和歌文学大系77・明治書院・二〇〇四年四月）

(6) 拙稿「やはらかに降る雪——〈つなぎ歌〉としての『一握の砂』435番歌——」（『国際啄木学会研究年報』第三号・

二〇〇〇年三月）。稿者は〈つなぎ歌〉に関して、他にも二編の拙論を報告しているので参照願いたい。

なお歌を改変する場合、その殆どは単なる推敲であると思われる。稿者による〈つなぎ歌〉という想定は単なる推敲ではなく、配列を完成させるために「元歌」がある場合それを「別歌」に改変する編集手法を意味している。重要なのは「推敲」なのか「別歌」なのかの判断になるが、その基準は曖昧な主観でなく、可能な限り客観的・論証的であることを心掛けている。本稿における考察がその基準を満たしているか否か、ご批評をお願いしたい。

又、『悲しき玩具』の問題になるが、啄木自身が「推敲歌」と「別歌」を中点の色区分で示していることが判明した個所もある。その意味で、拙稿「『悲しき玩具』歌稿ノートの中点」（『佐野短期大学研究紀要』第二〇号・平成二一年三月）も併せてお読みいただければ幸いである。

(7) 近藤典彦著『『一握の砂』の研究』（おうふう・平成一六年二月）

（補記）

本稿は、国際啄木学会釧路大会（平成二五年九月七〜八日）におけるパネルディスカッション「啄木再生―釧路からの甦り―」の報告内容の一部を骨子としている。その際に、多くの会友からご教示をいただいた。記して感謝したい。

